様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１６１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０３０９６

研究課題名（和文）MPCを用いたコラージュ療法の専門的トレーニングプログラムの開発に関する研究

研究課題名（英文）The study pertaining to the development of collage therapy specialist training with Magazine Photo Collage(MPC)

研究代表者
今田　雄三（Imada, Yuzo）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：８０２６３４７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：①コラージュ療法の一種であるマガジン・フォト・コラージュ(以下:MPC)を解釈するため基礎的データとして印象評定、形式分析、内容分析による数量的検討を行った。②MPCが制作者に与える心理的効果について質的に検討するとともに、MPCを用いたグループスーパービジョン(以下GSV)が面接能力向上のためのトレーニングとして有効なのを確認した。③上記②のデータと元にMPCを用いたGSVにおける心理的体験のための「コラージュ療法体験・セルフチェック リスト」を作成し、MPCを用いた個人スーパービジョン及び、新たに開発した簡易版MPCを用いたコラージュ療法トレーニングプログラムにおける研修効果を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
①MPCの解釈のための基礎的データを実証的に検討した研究は例がなく、今後MPCを臨床で用いる際、解釈上の目安として有効に活用できる。②クライエント及びセラピストの立場でMPCの制作を体験する際の心理過程を質的に検討した研究は例がなく、特に体験者がセラピストとしての役割を自覚することを実証的に検証した点で意義がある。③上記②のデータを元に考案したコラージュ療法体験・セルフチェックリスト及び簡易版MPCを導入した、より簡便なコラージュ療法研修プログラムを開発することが出来た。今後はこの新たな研修法を活用してコラージュ療法について実践的に学ぶことで、心理支援者の能力の向上が期待される。

研究成果の概要（英文）：The author ①qualitatively investigated the basic data to interpret Magazine Photo Collage(MPC), a type of collage therapy, using evaluative impression, formal analysis and content analysis, ②confirmed the efficacy of Group Super Vision(GSV) with MPC as a training of interview skills in conjunction with exploring the psychological effect of MPC on collage maker, and ③produced self-assessment checklist of collage therapy experience” with the data of ② for psychological experience in GSV with MPC, and investigated the performance of the personal supervision with MPC and the training program of collage therapy with the newly developed brief version of MPC.

研究分野：臨床心理学

キーワード：コラージュ療法　マガジン・フォト・コラージュ(MPC)　面接能力向上のためのトレーニング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

森谷（1988）が箱庭療法との関連性を発見して以来、わが国のコラージュ療法は独自の発展を遂げ、2009 年には日本コラージュ療法学会が発足し、今後はコラージュ療法の専門的なトレーニング法の開発や研修の組織化が急務である（森谷, 2010）。本研究は従来ほとんど行われてこなかった、個人心理療法に準じた枠組みでコラージュ制作を体験することを通して、コラージュ療法を技法として使いこなし、適切な解釈を行うための訓練を実施し、対象者にどのような心理的効果を与えることが出来るのかについて系統的に検証する。本研究はコラージュ療法の新たなトレーニング法の開発にとどまらず、臨床家の養成に資するプログラムの開発を目指すものである。

筆者は臨床心理士養成指定大学院の授業において、コラージュを加味した描画法である MSSM+C（山中, 1993）の制作体験を取り入れた実践研究を行った経験から、イメージを扱う技法を習得する上では、ロールプレイに準じた模擬面接場面を設定し、受講者がセラピスト（以下 Th と表記）役とクライエント（以下 Cl と表記）役を体験することが有用だとの示唆を得た（今田, 2008）。また筆者は Landgarten（1993）の考案したコラージュ療法の一種であるマガジン・フォト・コラージュ（以下 MPC と表記）を用い、院生が 1 対 1 の模擬面接場面でコラージュを制作し、セラピスト役がコラージュ作品と面接経過をまとめ、受講生全員で検討する形式のグループスーパービジョン（以下 GSV と表記）を試み（図 1）、その成果の一部を発表した（今田, 2010）。その結果から、MPC を用いた GSV には、(1)コラージュ療法における Th−Cl 関係の重要さを理解すること、(2)Th 役として Cl 役の表現を受け止め、侵襲性に配慮すること、(3)コラージュ作品の解釈には Th 役との対話によって引き出された C 役の連想が不可欠であることの 3 点を体験的に習得させることが可能であることが示唆されている。

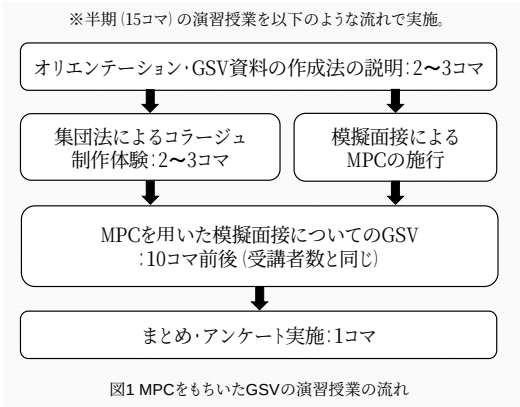

図1 MPCをもちいたGSVの演習授業の流れ

２．研究の目的

心理援助職を目指す大学院生及び臨床経験 5 年以内の心理援助者を対象に、コラージュ療法の専門的なトレーニンとしてはほとんど行われてこなかった個人心理療法の枠組みに準じた構造のプログラムを開発し、コラージュ療法を面接技法として使いこなし、適切な解釈を行うための訓練を実施する。具体的には MPC の制作体験を中核とした GSV を実施し、以下の(1)〜(4)の研究を行い、対象者に与える心理的効果を検証するものである。

(1)MPC の印象評定、形式分析、内容分析による解釈のための基礎的データの収集と検討。

(2)MPC が作り手に及ぼす心理的効果について修正版グラウンデッドセオリー法（以下 M-GTA と表記）（木下, 2003）により質的に分析する。

(3)個人心理療法の枠組みにおいて、Th がコラージュ療法を適切に使いこなすために必要な条件についてのチェックリストを独自に作成し、項目ごとの到達度を体験者が自己点検できるようにする。

(4)MPC を用いたグループスーパービジョンが、コラージュ療法の研修法として有効であるか、上記のチェックリストを用いて検証する。

３．研究の方法

(1)これまで筆者が大学院授業で実施した、MPC を中核とした GSV で制作された参加者のべ 90 名の作品及び作品への連想をデータとして、MPC の解釈仮説のための数量的研究を行なう。

(2)MPC を用いた GSV の参加者のべ 44 名の感想として得られた「Cl 役としてどのような心理的体験をしたか」「Th 役としてどのような心理的体験をしたか」の記述を元に、「MPC が体験者に与える心理効果」について M-GTA により質的に分析を行なう。

(3)上記(2)の分析によって得られた M-GTA カテゴリーを元に、コラージュ療法体験・セルフチェックリストを作成し、臨床経験 5 年以内の心理援助者 5 名を対象に、MPC の作成とフィードバックを行う形式での個人スーパービジョンを実施し、その際に参加者にセルフチェックリストによる評定を試みつつ改良する。

(4)心理援助職を目指す大学院生 8 名，および臨床経験 5 年未満の心理援助職 7 名の計 15 名を対象に、3〜4 名の小グループ単位ごとに，表 1 の手順で新たに開発した簡易型 MPC を用いたコラージュ療法研修プログラムを実施し、対象者の感想を質的データとして、新たな研修プログラムの参加者がどのような心理的プロセスを体験したのかを M-GTA により分析する。

表1　簡易版MPCを用いたコラージュ療法研修プログラム

1. 模擬的なCl体験プログラム	
準備物	コラージュBOX（「さまざまな物」と「人物」の写真を入れたBOX）、台紙（A4判の薄手のケント紙2枚）、スティック糊、はさみ，ワークシート、筆記用具。
手順	①第1課題 「さまざまな物」の写真を2枚だけ選んで1枚目の台紙に貼り、写真の連想を1枚目のワークシートに記入する。各自が作品と連想を発表し、質問や印象を伝え合いシェアリングする。
	②第2課題 「人物」の写真を1枚だけ選んで2枚目の台紙に貼り、人物が「思っていること」と「喋っていること」を連想し、2枚目のワークシートに記入する。その後、第1課題と同様の手順でシェアリングを行う。
	③選んだ写真のイメージに関するワーク 上記①、②で選んだ計3枚の写真のイメージ（ポジティブかネガティブか、またその理由）を3枚目のワークシートに記入しシェアリングを行う。
	④選んだ人物の写真の状況に関するワーク 上記②の人物の写真の状況を連想し、4枚目のワークシートに記入しシェアリングを行う。
2. 模擬的なTh体験プログラム	
準備物	MPCで製作された第1課題･第2課題の作品、作品への連想の記録。
手順	①第1課題 「さまざまな物」の写真を2枚だけ選んで1枚目の台紙に貼り、写真の連想を1枚目のワークシートに記入する。各自が作品と連想を発表し、質問や印象を伝え合いシェアリングする。
	②第2課題 「人物」の写真を1枚だけ選んで2枚目の台紙に貼り、人物が「思っていること」と「喋っていること」を連想し、2枚目のワークシートに記入する。その後、第1課題と同様の手順でシェアリングを行う。
3. 体験プログラムのふりかえり･評価	
準備物	コラージュ療法体験セルフチェックリスト（表2-1, 表2-2）、筆記用具。
手順	コラージュ療法体験セルフチェックリストへの記入、チェックリストがコラージュ療法の理解に役立ったかについての4検法による評定と役立った点の自由記述、今回の研修の感想（自由記述）を求める。

４．研究成果

(1) MPC の作品について形式分析および内容分析を実施した結果、①第 1 課題で使用される切片数は 6～11 枚が標準的であること、②第 2、第 3 課題で使用制限枚数を破る者は稀であること、③第 1 課題はウォーミングアップの性質が強く、切片の加工や配置、貼り合わせなど形式面への興味が喚起されること、④第 2 課題以降では枚数制限、方向づけられた連想、テーマの付与など制作意図が表現に与える比重が増し、選択した写真の内容に関する解釈が重要となることなどが明らかになった。本研究により MPC を解釈する上での目安として有効に活用できる基礎的データを提示することが出来た。

(2) MPC を用いた GSV への参加者たちがどのような心理的プロセスを体験したのかについて、M-GTA を用いて質的に分析した結果、①Cl 体験においては＜表現の促進＞＜感情体験＞＜内的作業＞の 3 つのカテゴリーからなる≪Cl 役としての内的体験≫、及び≪Th としての自覚≫と≪Th の存在意義の自覚≫という 3 つのカテゴリーが抽出され（図 1)、②Th 体験においては≪Cl 役との共有体験≫，＜Th 役としての機能＞と＜解釈についての学び＞の 2 つのカテゴリーからなる≪Th 役としての内的体験≫，≪Th としての自覚≫≪技法・授業形態の特色の影響≫という 4 つのカテゴリーが抽出された（図 2)。特に MPC を用いた研修プログラムは、体験者に Th 役としての役割を自覚させるという点で有用なコラージュ療法の研修法であり、心理援助者をめざす大学院生が Th として役割を自覚する上でも意義があることが示唆された。ただし、本研修法は受講者の事前準備などの時間的負担が大きく、上記の心的プロセスのエッセンスを担保しつつ、より簡便な研修プログラムとして再構成を図ることが課題として浮かび上がった。

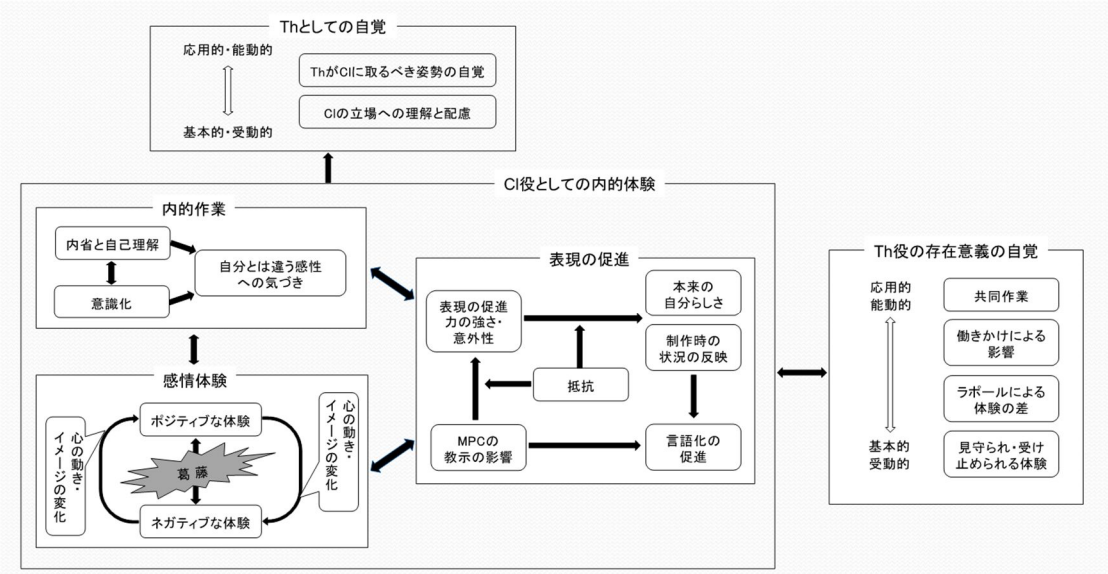

図2「クライエント体験」のプロセス

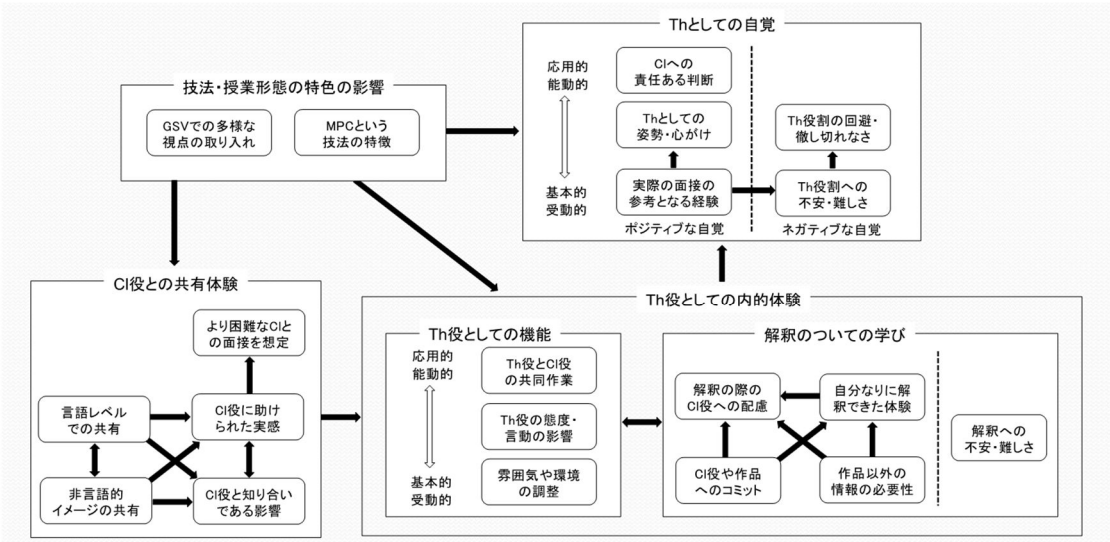

図3「セラピスト体験」のプロセス

(3)臨床経験が 5 年以内の心理援助職 5 名を対象に、個人心理療法の面接場面に準じた枠組みを設定し、MPC を用いて筆者が Th 役、対象者が Cl 役としてコラージュを制作する体験と、対象者が Th 役、筆者が Cl 役としてコラージュを制作する体験を行った後、対象者に「コラージュ療法体験・セルフチェックリスト」に回答してもらい、その結果を共有しながらインタビューを実施し、その結果を反映させてチェックリストの形式やチェック項目の表示文を修正して、以下の表 2-1（Cl 体験用）及び表 2-2（Th 体験用）として完成をみた。

(4)大学院生を対象としたコラージュ療法体験授業プログラム（今田,2010）を元に、上記の研究(2)で明らかになった参加者への負担を軽減するため、大幅な簡易化により時間的負担の軽減を図ったコラージュ療法の新たな研修プログラムを考案し、心理援助職を目指す大学院生 8 名および臨床経験 5 年未満の心理援助職 7 名の計 15 名に対し、3～4 名の小グループ単位ごとに実施した。参加者が制作した簡易版マガジン・フォト・コラージュ （以下簡易版 MPC と表記）の作品とその連想、コラージュ療法体験セルフチェックリストの評定、および自由記述の感想を元にした M-GTA による質的検討を行った。その結果、①新たなコラージュ療法研修プログラム及びコラージュ療法体験セルフチェックリストは参加者全員から『非常に役だった』または『やや役だった』との高い評価を受け、②コラージュ療法体験セルフチェックリストは表 3 及び図 4 に示したように、振り返りの質・量を向上させ、体験者の Th 理解・Cl 理解を促すことなどが示唆されたが、③簡易版 MPC のグループ制作はクライエント体験としておおむね適切に機能しているが、模擬事例のグループ検討は Th 体験として改善の余地があることがわかった。

今回開発した研修法が心理援助者のコラージュ療法の技能習得に貢献することが期待される。

表2-1 コラージュ療法体験セルフチェックリスト（Cl体験）

		チェック項目	非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
Cl役の内的体験	表現の促進	①意外な表現が出てきた				
		②自分らしさが出ていた				
		③状況が反映されていた				
		④表現への抵抗を感じた				
		⑤教示が表現に影響した				
		⑥言語化が促進された				
	感情体験	⑦ポジティブな感情が起こった				
		⑧ネガティブな感情が起こった				
		⑨ポジーネガの感情間で葛藤した				
		⑩感情の変化が生じた				
	内的作業	⑪自己への気づきがあった				
		⑫自己への内省が生じた				
		⑬自他の違いに気づいた				
Th役の存在意義		⑭見守られている感覚があった				
		⑮ラポールが得られていた				
		⑯能動的な働きかけを感じた				
		⑰共同作業をしている感覚がした				
面接場面での活用		⑱コラージュの扱い方の理解を理解した				
		⑲セラピストの姿勢が理解できた				

表2-2 コラージュ療法体験セルフチェックリスト（Th体験）

			チェック項目	非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
Cl役との共有体験			①非言語イメージが共有できた				
			②言語レベルでの共有ができた				
			③面識のある者同士である影響が感じられた				
			④対象者の健康度の高さを感じた				
			⑤病態水準の重いClには難しいと感じた				
Th役としての内的体験	Th役としての機能		⑥面接者の雰囲気や環境への配慮を感じた				
			⑦面接者が制作者に与える影響を感じた				
			⑧二人で共同作業をしている印象を受けた				
	解釈についての学び		⑨Th側のコミットメントが必要とわかった				
			⑩作品以外の情報が必要だとわかった				
			⑪解釈することの不安・難しさを感じた				
			⑫自分なりに解釈できた実感を得た				
			⑬解釈は慎重に扱うべきだと感じた				
Thとしての自覚			⑭実際の面接に向けての参考になった				
			⑮Thの姿勢・心がけに気づけた				
			⑯作り手（Cl役）の気持ちを理解できた				
			⑰Thという立場の不安や難しさを実感した				
			⑱Thの役割に徹しきれない気がした				
セラピー場面で活用を想定			⑲他のメンバーから多様な視点を得た				
			⑳コラージュ技法の特有さを感じた				

表3 M-GTAにて生成された「コラージュ療法体験・セルフチェックリストの効用」の概念およびカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	定義	ヴァリエーション
振り返りが促進される	振り返り可能な要素が増える	視野が拡大する	自分で振り替り，気付ける要素の数には限界があるが，リストを参照することで視野が拡大する。	自分の新たな視点や，足りない視点に気づかされた（④-2）
		「盲点」を埋める	単に視野を広げるというより，自分にとって盲点であった要素の存在を自覚させるきっかけとなる。	ワーク内では気にしなかった部分に対して改めて気づきを得られた（⑦-1）
		自己を客観視する	自分自身について客観的な視点を向けて振り返ることができる。	クライエント理解をする上で，まず自分自身の体験を客観視することができた（③―1）
	振り返りの質が向上する	具体的に振り返る	コラージュ体験について即応的，具体的に振り返ることで言語化，可視化が促される。	自身が漠然と感じていることを言語に落とし込みやすかった（②-1），すぐに書き込むことで，写真を選んだ時に思ったことをそのまま書けた（⑥-1），可視化されることによって分かりやす（なった（⑧-1），何じな（ではな（具体的に自分を振り返ることができてよかった（⑮-1）
		理解が深まる	コラージュ体験について表面的ではな（，深（理解できたことを実感する。	こういう意味があったのだなと理解を深めることになったように思います（⑩-2），自己への気づきがあったことをクライエント自身が気づくことができる点（⑬-1）
		考えがまとまる	チェックリストを行うことでコラージュ体験に対する自分の考えが整理されまとまる。	チェックリストに記述していくなかで自分の考えがまとまり，気づきを得られることにつながった（⑪-1）
クライエント理解・セラピスト理解につながる		クライエントの気持ちが想定される	自分のコラージュ体験を通してクライエントの気持ちや心の動きなどが想定される。	自分がクライエントの気持ちを実感することができた（④-1），クライエントの心の動きや表現したいことへの理解（⑫-1）
		セラピストの役割が想定される	自分のコラージュ体験を通してセラピストの役割などが想定される。	セラピスト役として注意，注目した方がいい点などに気づくことができました（⑩-1）

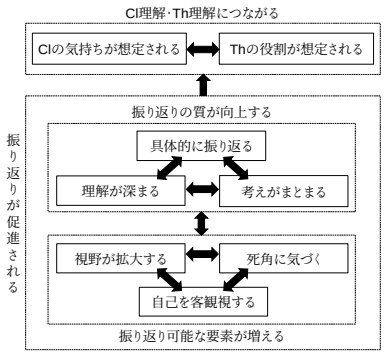

図4 コラージュ療法体験セルフチェックリストの効用

文献

今田（2008）．MSSM の実践的活用のための展望 ―文献研究・臨床心理士養成における授業実践・及び新たな視点による事例の考察― 鳴門教育大学研究紀要 23,209-226.

今田雄三（2010）．臨床心理士養成課程におけるコラージュ療法体験授業の展開：施行法・技法の選択・検討法などの工夫を中心に 鳴門教育大学研究紀要 25,218-231.

木下康仁（2003）．グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い 弘文堂

Landgarten,H.B.(1993)．Magazine Photo Collage:A multicultural assessment and treatment technique．Brunner Routledge,Inc.（近喰ふじ子・森谷寛之・杉浦京子・入江茂・服部令子(訳)(2003)．マガジン・フォト・コラージュ―心理査定と治療技法 誠信書房）

森谷寛之（1988）．心理療法におけるコラージュ（切り貼り遊び）の利用 精神神経学雑誌 90(5)，450.

森谷寛之（2010）．日本コラージュ療法学会第 1 回大会基調講演 コラージュ療法入門 学会発足にあたって 研究における初段階 ―22 年のあゆみと将来に向けて― コラージュ療法学研究 1(1)，81-89.

山中康裕（1993）．コラージュ療法の発展的利用 ―MSSM+C 療法の紹介― 森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕編 コラージュ療法入門 創元社 123-135.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 今田雄三	４．巻 11
２．論文標題 マガジン・フォト・コラージュ(MPC)の「クライエント体験」および「セラピスト体験」における心的プロセスに関する質的研究 －大学院授業アンケートのM-GTAを用いた検討－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 コラージュ療法学研究	６．最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今田雄三	４．巻 10
２．論文標題 マガジン・フォト・コラージュ（MPC）に関する基礎的研究 －解釈の指標となる数量的データの検討－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 コラージュ療法学研究	６．最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 今田雄三
２．発表標題 初心者を対象とした新たなコラージュ研修プログラムの開発
３．学会等名 日本コラージュ療法学会 第13回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 今田雄三
２．発表標題 MPCを用いた大学院生へのグループスーパービジョンの効果について －「クライエント体験」「セラピスト体験」に関するM-GTAを用いた検討－
３．学会等名 日本コラージュ療法学会第11回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 今田雄三
２．発表標題 マガジン・フォト・コラージュ（MPC）に関する基礎的研究 －解釈の指標となる数量的データの検討－
３．学会等名 日本コラージュ療法学会第10回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関